

## 報 告

### アメリカ留学報告記 第4報

#### 再び学生に — ニューヨーク大学ワグナー公共政策大学院

聖隷浜松病院 てんかん科

山本 貴道

##### ■貧富の差

私はアメリカでの臨床をニューヨーク大学 (New York University : NYU) の病院で行った。そこはNYU Medical Centerと呼ばれ三つの病院の複合施設となっていた。マンハッタンの1番街 (First Avenue) 沿いに並んでいるのだが、その周辺は高層のマンションが建ち並ぶマンハッタンの中でも比較的安全な良い所である。34丁目を西に向くとエンパイアステートビル (Empire State Building) があり、特にこの通り沿いは賑やかな場所だ。

NYU Medical Centerで働くと、その3病院をカバーすることになる。大学病院であるTisch Hospitalはnon-profit organizationとは言っても完

全なprivate hospitalで、ここを訪れる患者は裕福な層が多く着ている服装を見れば一目瞭然である。そこからたった1ブロック南側にあるのがニューヨーク市の経営する市立病院であるBellevue (ベルビュー) Hospitalとなっている。この1ブロックで風景が変わってくる。私が主として勤務したNYUのてんかんセンター (NYU Comprehensive Epilepsy Center) のフロアからBellevue Hospitalの隔離病棟らしき部屋が見えるのだが、アメリカの最先端医療とは程遠い脳裏から離れ難いような景色であった。また通りから病院の玄関までの間は小さな公園のようにになっているが、そこには浮浪者風の人々がたむろし、昼間でなければかなり危険な印象を受けるだろう。その南側にある



Bellevue Hospitalの記念物的に貴重な古い建物。既に改築が始まっていた。  
来院する患者層を反映して、病院内の掲示は英語・スペイン語・中国語となっている。



シラキュースにあるニューヨーク州立大学。右手が大学病院で、左手の建物は医師達が自分のオフィスや外来を構える。中央に見えるERは病院に隣接するように建て直された。救急ヘリは病院屋上のヘリポートに毎日ごう音をたてながら着陸する。多すぎる患者で時々受け入れ困難になっていた。

Manhattan VA Hospitalも同様で、主として退役軍人が利用するのだが、目付きは虚ろで歩行は千鳥足のどう見てもdrug abuseとしか思えない患者がその周辺をうろついている。

アメリカに渡る前に日本で働いていた時は、患者の社会的背景などはそれ程考えずに、また考える必要もなく医療を行っていた。Tisch Hospitalではそれで良かったが、BellevueやVAではそうは行かなかった。BellevueやVAに来ている患者は、アメリカでは所謂弱者の立場にある人々だった。建前はそうでなくとも実際は貧富の差で受けられる医療の質まで決められてしまう国と言えよう。ある統計によると、アメリカでは5%の人口で国全体の富の65%を分けあっていると言われている。

## ■ER

救急室 (ER) は貧困層にとっては通常の外来受診の場となる。これを理解するのにしばらく時間を要した。彼らは健康保険もなく、またキャッシュで支払う能力は毛頭無く、支払い能力があるかを厳しくチェックされる開業医の外来 (clinic)

には実際の所かかることはできない。Appointmentが取れないのであるからできるだけ我慢して、いざとなればERに駆け込む。ERが最後の頼みの綱 (safety net) となっている。ERでの待ち時間が6～8時間というのは珍しいことではない。アメリカで最初の3年近くを過ごしたシラキュース (Syracuse) では、ある病院のERで心臓病の患者が診察を待っている間に死亡し新聞に大きく掲載された。シラキュース市内にある大きな4病院でも周辺人口も含めて100万人をカバーするのは到底不可能で、時々ERでは受け入れ不能な状態となり、ローカルニュースや新聞では病院の名前があがっていた。人気番組「ER」でも現実によく遭遇しそうな場面が描写されているが、アメリカの社会的背景の現実にはほぼ即していると考えて良いと思われる。

## ■移民の現実

Manhattan VA Hospitalにいた時は、あるメキシコからの移民の患者を受け持った。受け持つと言ってもVA Hospitalでは主治医を明確に決める訳ではなく、逆に言うとも患者側が主治医を指名す

ることはできない。彼は若い頃アメリカに渡ってきて、兵役に志願しグリーンカードを取得した。親類を呼び寄せ、今は大家族に囲まれて生活している。

彼は三叉神経痛を患っていて、かなり神経質な感じであった。手術前夜に入院してくるのであるが、問診をとりながら話をよく聞き手術の説明を行った。これ程親切に話を聞いてもらったのは初めてだと言う。お陰で痛みもすっかり良くなった。私は何やら診断そのものに疑念を抱き始めた。本当に手術する意味があるのだろうか。明日の手術はやるもキャンセルするもあなたの自由にして良いと告げ、その夜は病室をあとにした。翌朝、脳神経外科の医師の間で、手術をどうするか問題になった。私は反対したが、賛成多数で手術となった。痛みはどうなったのか、結果は想像していただきたい。このような話は枚挙に暇が無い。その後もその患者や家族から電話やメールでの相談が続いた。空港のホテルでマネージャーをしているという息子の一人は、「ホテルを使う時は連絡してくれ、安くするよ。」と言ってくれた。クリスマスには家族からメールが届いた。このような患

者への接し方は日本であれば普通に行われているのではないだろうか。しかしながら、健康保険を持てる者と持たざる者で行き先の違う、分断されたアメリカの医療供給システムでは、先述したような患者や家族に対して医師達の目は極めて冷たい。

#### ■マクロな視点

アメリカに渡る前はその優れたトレーニングシステムばかりに目を奪われていたが、日々の忙しい臨床をこなしながら目の前のアメリカ人達を見ていると、この国では一体何が起きているのか、もっと巨視的にアメリカ医療を捉えたいとなった。その頃ある雑誌で、勤務していたNYUの中に医療政策・医療管理学 (Health Policy & Management) では全米でNo.1にランキングされているNYU Wagner Graduate School of Public Service (NYU Wagner) という公共政策を教える大学院があることを知った。医療関連以外にはPublic & Nonprofit Management & Policyと大都会ニューヨークらしいUrban Planningの分野を専攻できる。興味湧き問い合わせてみた。近々open houseとい



New York VA Hospital全景。ニューヨーク州・ニュージャージー州・ペンシルバニア州の3州から患者を受け入れる。全米でも評価は高いのだが、政府の予算削減と看護師不足で病棟の一部は閉鎖が続いていた。退役軍人達はPTSD (post-traumatic stress disorder) を患っている頻度が極めて高く、精神的に問題のある患者が多かった。



授業を受けたニューヨーク大学の校舎。NYU Wagnerはこじんまりとした小さな大学院であったが、難関といわれるロースクールやビジネススクールは学生数も圧倒的に多く、世界中から学生が集まっている。

う説明会があるので来てみてはどうかと聞かれ、そうすることにした。NYU Wagnerは病院のある1番街とは全く別で、ニューヨーク大学の本部のあるWashington Squareにあった。Washington Squareはマンハッタンに古くからある公園で、それを中心にNYUの校舎が点在している。China TownやSoHo (South of Houston Street) に近い。NYUのキャンパスは、普通の大学のようにゲートがあってそこから大学というように境がはっきりしている訳ではない。ビルの間に校舎となっている建物がとびとびにあり、学部や大学院がそれぞれ一つのビルに収まっている、まさにマンハッタンならではの大学である。

Open houseでは全米から入学に興味を持った人達が集まって来ていた。いろいろ詳しい説明を聞き、入学は3学期制のどこからでも可能なことを確認し、とにかくapplyしてみることにした。既に臨床の方ではてんかん外科も自分でやれる自信ができていたので、日本に帰国する前にもう一つ何か別のものを身につけたかった。主任教授や共に働いていたスタッフに事情を話し理解してもらった。慰留もされたが、既に心は動かなかった。

3通の推薦状を用意し、完成させたapplication formといっしょに郵送した。同じNYU内で働いていた身であったので、NYU Wagnerへの入学には支障無くすんなり入学を許可された。

#### ■再び学生に

専攻するコースはAdvanced Management Program for Cliniciansという既に医療機関で経験を積んでいる中堅の人々を対象にしたものであった。入学した学生の職種は多彩で、医師はむしろ少なく事務職が多かった。コーネル大学の放射線部門に勤める女性、某巨大製薬メーカーの営業部門の女性、既にグループで開業している内科の医師など。彼女/彼らが苦勞して修士 (Master) の学位を取るのには、アメリカ社会での出世には肩書が極めて重要だからである。ただし博士 (Doctor of Philosophy: Ph.D.) は別で、大学に残る人々がその後も研究を行っていくために取るべき最低限の資格となる。

2003年1月15日、早速オリエンテーションが行われた。学部長らからNYU Wagnerの使命など延々と話があった。最後は一人ずつ自己紹介をしていっ

た。自分のバックグラウンドとなぜこの大学院に入学したのか簡単に述べた。私の様な外国人は数える程でほとんどがアメリカ人であったが、NYU Medical Centerの時から孤軍奮闘には慣れていた。

Spring SemesterではCommunity Health & Medical Care・Financial Management for Public, Health, and Not-for-Profit Organizations・Managing Public Service Organizationsの3科目を選択した。1月21日、最初の授業にもかかわらず

数十ページのassignment (宿題) が出ている。学生はあらかじめcourse syllabusという授業内容の詳しく書かれた概要に目を通し予習をしてくる。アメリカの大学院での授業は予習をしないといまず理解が難しい。アメリカ人でさえ必死でやるのであるから、外国人の自分は尚更であった。1年間の想像を超えた苦しい日々が始まった。

(つづく)